

マタギ語とアイヌ語の言語接触とマタギ語の起源と歴史

板橋 義三

記号の説明：

マタギの地域名

[A] = 阿仁マタギ、[S] = 仙北マタギ、[I] = 岩手マタギ、[C] = 鳥海マタギ、[O] = 雄勝マタギ、[E] = 平賀マタギ

品詞：

N = 名詞、V = 動詞、Adj = 形容詞、Adv = 副詞、S = 文、Postp = 助詞 = 格接語

言語：

P.J.: 日本祖語 O.J.: 古代日本語 M.J.: 現代日本語 A.: アイヌ語

○ 序論

○・一 本研究への経緯

本論は現在では言語学の分野では非常に関心が薄れてしまった、マタギといわれる特殊狩猟集団と、その集団に使用されていたマタギ語についてである。

従来、民俗学、文化人類学では大変関心が高いが、言語学、特に方言学、歴史言語学では非常に関心が低く、言語学の観点から著書として執筆されたものはない。一九六〇年代にほんの一部の言語学者(例 服部四郎など)には関心が持たれたが、現在ではほとんどマタギ語自体には言語としても価値を見出されないと考えられている。現在では言語学からの関心が薄れた原因の一つに、マタギそれ自体の組織の弱体化と相まって、マタギ語の特殊方言と捉えることができなかつた経緯があると見られる。特に、マタギ、アイヌ(史的には「蝦夷」といえば、東北地方北部の山形、秋田、青森、岩手などがその中心地であり、非常に地理的に限定されていることもある)のため、その言語の重要性が認められなかつた。

○・二 目的と内容

本稿ではマタギ語の中に数多くのアイヌ語彙がどうして見られるのか、いつ頃アイヌ語との接触があつたのか、その借用語彙はどのような言語学的特徴と言語学的構造を持っているのかを探索するのが目的である。

マタギ語の中に見られるアイヌ語語彙について、本稿の著者は長い間興味・関心をもつてみてきたが、特にその語彙的側面、形態的側面に焦点を当ててみてきた。また、文化的には熊猟を中心とする狩猟文化とその儀式的

マタギ正装



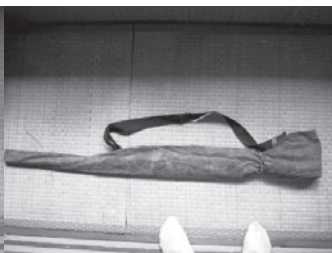
クマナガサ



ワラダ (兎狹)



サンダンジュウ



背景にも先住民族的英知が見られる点にも重要性があると見られる点にも関心があつた。
 熊猟の文化はツングース人の狩猟団におけるツングース諸語にも多くみられるが、それに対応する語、例えば、ウイルタ語では *ḡḡ* 「野獣、熊」であり、何ら言語的共通性が見られないし、儀式なども特にツングース文化にはないので、何らマタギとツングースとの史的関係はないと見られる。

一 マタギについて

一・一 マタギとは？

マタギとは本来主に東日本特に東北地方に住む日本人で冬場になると組みをなして山(山小屋)に入り、二、三日から二、三か月に渡り、野生動物や鳥など、特に熊を狩猟する二、三人から一〇人前後の、非常に狩猟に長けた集団を言う。山に入る前に、オコゼという魚と同じ位醜い山の女神に狩猟するための許可を得るため、それを祭つてある神社に参拝に行くという。阿仁マタギ(佐藤勝次郎氏)の山での正装、猟具のほんの一部の写真を掲載しておく。

猟場ではマタギはそれぞれ役割があり、どのように移動して獲物を仕留めるかがほぼ決まっている。下に仙北マタギの猟場略図（巻狩りといわれる手法）を示す。それとともにマタギ組織の猟場における役割も以下に示す。

シカリ・マタギの長

ムカエマツテ（ムカデマツトとも）…見張り役、全体の行

動を指図する合図役

ブツパ…鉄砲を持った射手

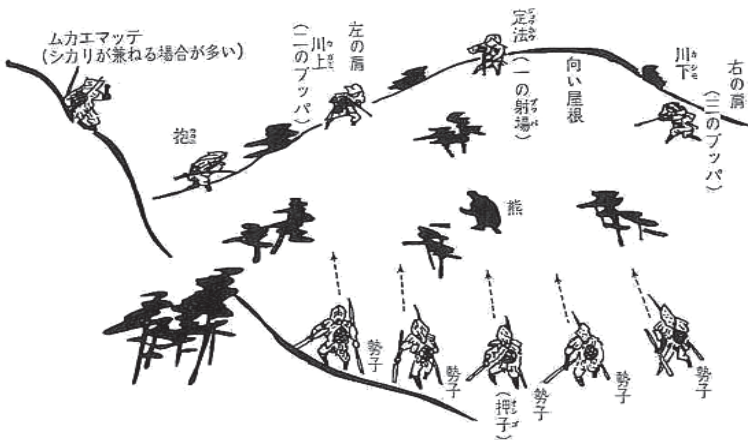
セコ（勢子）…鉄砲を持たず、獲物を追い出す役目

二一 マタギ語の定義と現状

二・一 マタギ語の定義

マタギ語とは主に東北地方の北部でマタギ狩猟集団によって使用された秘密語であり、アイヌ語の語句の影響を部分的に受けた、日本語の地域方言の一種である。以下の点で非常に特異な言語である。

(二) 社会方言と考えられる点



仙北マタギの猟場略図

東北地方の村に住む、社会的に儀式的につながりを持つのがマタギといわれる特別な男性狩猟集団によって話される言語である。冬場に特定の山にはいり、野生動物を狩る際には、その集団内の個人は特定の役割をもつ。

(二) 地域・時限方言と考えられる点

東北地方のそれぞれの地域の方言で話すマタギ語は冬山に入ったときだけに話す山言葉である。狩猟のために山に入らず里にいるときは冬場であつてもマタギ語を話すことはない。

(三) 二種類の秘密語と考えられる点

① マタギ集団以外の人間に対する秘密性…

一般に村人には理解できない、特殊な語句や文を、山で狩猟をする際に使用するので、秘密語として考えられる。従つて、家族や友人などと山に入ったとしても、マタギ語を使用することはない。マタギの集団として山に入ったときだけである。里人という人間に対する秘密性である。

② 山の女神に対してのみ使用する言語であるという秘密性…

もう一点は山を占め、そこにあるすべてを支配している山の女神のためだけに使用するという秘密性である。山を支配するすべての自然は神聖であり、マタギが山で狩猟する際にはその女神の狩猟許可を得ないといけないのである。

二・二二 マタギ語の現状

現状ではマタギといわれる特別狩猟集団は、一世代前のマタギ集団が行つていたようには集団狩猟は行われな

くなくなった。それは全般的な生活様式の変化、例えば、経済生活の飛躍的向上、科学的・物質的見方への変化、狩猟時期が非常に限定され、山に自由に入れなくなったことによる。

またマタギという狩猟集団に対する社会的な価値が世間一般にも見出されなくなってしまったことにもよる。今日ではマタギサミットや他のマタギ関連催し物が開かれるが、一般にはマタギ語それ自体はほとんど忘れ去られている。

マタギ語の生存状況は最も低く、ほとんど瀕死状態である。二〇一九年度におけるマタギ語はほぼ消滅したと言っても過言ではない。それはマタギ狩猟集団自体がその集団として存在せず、田畑を荒らすようになったり、住宅街に出没したりして、人命を脅かす熊を捉える一時的な仕事として機能している。

また、マタギ狩猟集団が存在しなくても、マタギ狩猟文化のイメージアップや維持を図る活動などにも力を入れていく地域（阿仁マタギ）やエコツアーの一環としてマタギ文化を取り込んで観光（グリーンツーリズム）や地域おこしの活動をしている地域（目屋マタギ）もある。つまり、実際の現状はマタギとしての狩猟というよりも現代の社会正義に則った活動やお祭りなどでもてなすための活動として残っていると見た方がよいであろう。

一般に言語と文化の消滅速度は異なり、物質・精神文化が衰退していくと、言語が次の世代に継承されないことがほとんどであり、言語がより速い速度で消滅していく（アイヌ語も同様である）。よって、マタギ狩猟文化が消滅しつつある現状では、マタギ語それ自体が次世代に継承されないため、マタギ語の消滅があつという間に起こってしまった。

現時点では、どの地域のマタギ集団もその地域マタギ語そのものが使用されていない。それと同時に確保した熊などの解体の際には儀式を行い、呪文を唱えてから解体するということが必須だったが、それも失われてしまっ

ているようである。

三 「マタギ」と「マタギ語」という語に関する源流と歴史

「マタギ」という語に関する源流・起源については概略二つの大きな見方がある。そのほかにも二、三、異なった説があるが、実際にはあまり実証的ではないので、ここでは最も典型的な言語学や人類学で見られる説を提示する。

マタギとアイヌにおける共通の言語学的側面は両文化に非常に強く根付いている。マタギ語における *matagi* 「(熊) 狩人」は日本祖語においては **matanki* 「(熊) 狩人」にさかのぼると同時に、他の多くの語彙もアイヌ語と共通している。

これについては二つの説があり、マタギ語とアイヌ語の歴史的関係と関連があると考えられる。まず、音韻的・意味的に可能と思われる、「*matagi*」の語について、マタギ語とアイヌ語の対応において歴史的関係に関する、異なった見解を見てみる。

- ① マタギ語とアイヌ語の一部の語彙の共通性は単に偶然の一致である。
- ② マタギ語とアイヌ語の一部の語彙の共通性は同起源である。
- ③ マタギ語とアイヌ語が接触し、マタギ語がアイヌ語から語彙等を借用した。
- ④ マタギ語において *matanki* という語が創造され、その後、アイヌ語がそれをマタギ語から借用した。

①の説はマタギ語の中にこの語の他に多くのアイヌ語が見出されることが説明できないので、この説は信ぴょう性は低い。②の説は両言語に共通なのは語彙であり、他の言語レベル、例えば、文法などは全く異なるというような点が説明不可能である。よって、同起源ではない。

③の説明が正しいとするには、③ではアイヌ語の *matanki* がマタギ語の *matagi* よりも古い語であることを示すことと、いどこでどのように *matagi* がアイヌ語から借用されたのかを示す必要がある。またこの語がすべてのアイヌ語方言に共通して見られる語なのかを確認することが必要である。

最後の④が正しいと言うためには、*matanki* という語が日本語内で誕生したことの裏付けとその起源となる語の存在を確認する必要がある。その裏付けと確認がなければ、マタギ語にはたたくさんの共通語彙が見られるという事実を説明することができない。

この後者③、④の二つのシナリオとの関連で、次の二つの相反する考え方が出てくるが、これは言語学的・歴史的証拠や間接的証拠に基づいていると考える。

(一) 日本語 *matagi* は日本祖語 **matanki* からの派生とする見解

日本語の名詞 *matagi* 「跨ぐ人、何かを跨ぐこと」は動詞 *matagu* 「跨ぐ」から派生し、複合名詞 *ki-matagi* 「木跨ぎ」、*yama-matagi* 「山跨ぎ」の語が形成され、両者ともに *matagi* は「マタギ、特別熊狩り集団」の意味で使用されるようになった。マタギ語は日本語の特殊な方言であり、あくまでも日本語である。また、同じ理由により、左記の日本祖語からの言語変化も同じである。

また、もう一つの裏付けとして、古代日本語 *matagi* から日本祖語 **matanki* が再構されている。特に注視した

いのは古代日本語の語末音節の CV [-gV] が日本語祖語では *NCV [-nkV] に前鼻音化音節に再構され、これは日本語と日本語祖語との間の規則的な音韻対応である。また、これと並行した音韻変化がある同時期にみられるが、後述する。

(二) アイヌ語 matanki からの派生とする見解

現存するアイヌ語方言辞典では、アイヌ語 matanki 「熊狩人、狩りをする人」は平取、静内、帯広、釧路方言の北海道南部沿岸平野部方言にしか見られない（菅野 一九九六：四二三～服部 一九六四：一一二）。その語を基盤にして複合語としたもの matankine-epaye < matanki-ne-e-paye 「狩人になる、狩りに行く」マタギ」ハ「マタギになる」ヘ「行く」田村 一九九六：三七九）がある。

その他の方言では ekime 「(狩猟しに) 山に行く」< ekim-ne 「へ・山・である」(千歳方言：中川二〇〇〇：七九)、kimoyki 「山で狩猟する」< kim-oy-ki 「山・で・物事を・する」(沙流方言：田村 一九九六：三〇四)か、その語の複合語、または全く熊狩や狩猟に関する同源語が見られないかのどれかである。よって、この語はアイヌ語起源であるという蓋然性は非常に低いと思われる。

このアイヌ語の matanki は日本語の *matanki と全く同形であるが、この日本語の *matanki は古代日本語の matagi から再構したものであり、アイヌ語から借用したものではなく、よって、アイヌ語の語とは単に同形なのである。この日本語からそのまま借用した、あるいは古代日本語から規則的な音韻対応をする形で借用した蓋然性が強くなってくる。OJ 前鼻音十有声閉鎖音 [-^hg] < A 鼻音十無声閉鎖音 [-nk] との対応が規則的である。

さらに、アイヌ語の基本音節数は単音節CV(C)であり、その点ではアイヌ語の *matanki* は三音節であり、これは複合名詞である可能性が高くなる。この語のそれぞれの単音節が語彙的意味を持つことがアイヌ語では規則であるため、もしこの語を単音節ごとに分解できるとすると、*ma* 「泳ぐ、焼く」-*tan* 「この」-*ki* 「する」となる。しかしながら、この三音節が一つの語の意味として一貫性をもたないので、これは日本語からの借用である蓋然性が非常に高い。

これらの事実や蓋然性から、このマタギ語における *matagi* はアイヌ語からの借用ではない蓋然性が非常に高い。もしアイヌ語からの借用(他の言語からの借用である蓋然性はほぼなし)でなければ、この語は日本語内で形成されたものであるとすることができる。つまり、マタギ語における *matagi* は日本祖語の **matanki* からあるいは古代日本語の *matagi* からアイヌ語へと借用されたものであると言える。

さらにもう一点付け加えるとすれば、名詞 *matagi* は動詞 *matagu* から名詞に派生したものであるから、その本来の動詞語幹は日本語であり、最も典型的な音節数の二音節であることも間接的に支持する。これはアイヌ語の *matanki* は日本語あるいはマタギ集団から借用されたとすることが最も理にかなった解釈であると言える。

PJ**matanki* [matanki] > OJ, MJ *matagi* [matapi]

この形態に変化は、それと並行して同時に中期日本語(平安時代(七九八—一一八五/一一九二))以前に次の一連の前鼻音化現象が起こったものと見られる：

/*-mp-/ > /*-m̥p-/ , /*-nt-/ > /*-n̥t-/ , /*-nk-/ > /*-ng-/ or /*-ŋ-/

になったと見られる。

しかし、その時期では上代の表記と音韻の対応が異なっていることから、この一連の変化も *matagi* の語の変化（マタギ語 $\langle \text{matagi} \rangle$ が $\langle \text{matagi} \rangle$ も上代日本語（奈良時代（七一〇―七九三））以前であると考えられるようになった。

従って、マタギという語の形成されたのは上代以前であっても、その後、正式な集団としての意味を持たず、平安期、鎌倉・室町期を通り、江戸初期になるまで単に「熊狩り、狩人」などの意味で時空間上非常に限定的に使用されていたと考えられる。

その後、一七世紀ごろをもってマタギという語が初めて正式に特別狩猟集団としての意味で使用されるようになった（砂子瀬物語などによる記載）と考えられる。また、津軽藩日記（藩日記…一八世紀に作成）などから、マタギという名称が単に「猟師、狩人」ではなく、「狩猟技術に優れた特別待遇の熊狩人」に昇格したことが記されている。このころにはマタギも正式な狩猟集団として少しずつ認められていったものと思われる。初めは少人数の二、三名の集団から始まり、最終的には一〇名以上の確立した集団となってマタギ狩猟集団が結成されていった。

これらのことから、以下のように、マタギの意味付けが変化していったことがわかる。

- ① 猟師個人（非正規の小集団も存在していた）
- ② 大型の熊などを狩猟する優れた技術をもった特別な猟師個人
- ③ 大型の熊などを狩猟する優れた技術をもった特別待遇集団とその集団内の個人の両方（津軽藩など正式な狩猟集団のマタギとして認定した）。

このような藩などからの正式な認定により、江戸初期のシャクシャインの乱（一六六九―一六七二）とクナシリ・メナシの戦い（一七八九）などのアイヌとの闘いが北海道で起きても東北のアイヌはマタギなどとは継続的に良い関係を維持したと見られる。

四 マタギ語とアイヌ語の接触

一七、一八世紀には北海道でアイヌと和人との間に争いや戦いがあつたものの、東北地方のアイヌとの関係は信頼が厚く、その争いや戦いが問題になることはなかった。その結果としてマタギは多くのアイヌを、そしてアイヌ語を受け入れ、その先住民族的意識（特に自然との調和）をも含めて日本人のマタギとしてのアイデンティティの形成に貢献したのではないかと思われる。

つまり、単にアイヌ語を借用したことにとどまらず、意識・文化的な面までも一部変革し、より自然に沿った生き方を学んでいったと見られる。ここではまず言語学的（音韻対応）側面を見ていく。

① アイヌ [kanto] = N [天、空]

マタギ [kado] = N [天候] [A?]

② アイヌ [makiri] = N [小刀]

マタギ [magiri] = N [小刀、槍] [A, S]

③ アイヌ [pake] = N [人の頭、動物の頭]

マタギ {bakkei}=N [熊の頭] [A, I]

{bakkyai}=N [熊の頭] [S]

{hakei}/ {gashirai} {hakei} {hakei}=N [切取った熊の頭] [A?]

{hakei}=N [頭] [A?]

{hakketai}=N [崖] [A?]

④ アイヌ {pirai}=N [崖]

マタギ {hirai}=N [ケン網とこう熊を捕まえる網] [A?]

{hira-odoshi}/ {occhoi}=N [半開きになった本の形をした、圧死仕掛けの獣とり捕獲機] [S]

{odoshi-hirai}=N [木組み構造物の上にトントンほどの石を積み上げて作る釣り天井式の熊捕獲機] [A, S, I]

{hira-mae}=N [斜面] [S]

{hira-tsugu} < {hira- } > =S/V [崖-つへ：雪崩が起る] [A, S, C, O, H]

{oo-birai}/ {ne-birai}=N [大-崖/根-崖：春の土のままの雪崩]

{sasa-hirai}=N [笹-崖：山の傾斜を走る新しい雪の雪崩]

⑤ アイヌ {pono}=Adj [小やこ]

マタギ {hono}=N [中型のカモシカ] [A?], [子供カモシカ] [H]

{honogoi}=N [一歳程度のカモシカ] [I, C]

⑥ アイヌ {poro}=Adj [大きこ]

マタギ {horoi}=N [たへやん] [A]

{horō-bidagi}=N [大きい：大人] [A]

{horō-kachō}=N [大きな器物] [S]

{horō-ni-tsumasei}=S/V [ホロニツキセウ：寝る] [A]

⑦ アイヌ {sampe}=N [心臓] [A?]

マタキ {sabe}/[sa^mbe]=N [熊々カモシカの心臓'胆] [A?]

⑧ アイヌ {seta}=N [大]

マタキ {heda}/[sedal]/[seta]=N [大] [A, S]

{setta}=N [大の肉] [S]

⑨ アイヌ {upas}=N [熊]

マタキ {waba}/[wanba]/[wash]=N [熊] [A, S, C, O, H]

{washihashigogu}<[wash-i-hashi 熊-u-gogu 動√]=N [熊] [A]

{washihashigori}<[wash-i-hashi 熊-igori 起√]=N [熊] [起√]=N [熊] [起√]

⑩ アイヌ {waka}=N [水]

マタキ {kasuke-wakka}=N [水?wakka；水] [A, S]

{meguri-wakka}=N [水-wakka；水] [S]

{inigori-wakka}=N [水-wakka；水] [A]

{kiyo-wakka}=N [水-wakka；水] [S]

{ma-wakka}=N [水-wakka；水] [A?]

[waka]=N [匣(水)] [S]

[waka]=N [水、酒] [A, S]

[uji-waka-hedarui]=S [匣 - waka- 滴る : 小便をする] [S]

** マタギ語では用言の借用語は用言としてではなく、体言として借用される。

上述のように、一〇語彙項目があり、その中にはそれぞれ複合語が多く見られる。この複合語は主に次のような言語結合になっている。

名詞＋名詞…日本語＋アイヌ語、アイヌ語＋日本語

名詞＋動詞…アイヌ語＋日本語

名詞＋名詞＋動詞…日本語＋アイヌ語＋日本語、

アイヌ語＋日本語＋日本語

単体名詞は常に日本語起源かアイヌ語起源で、多くの名詞は日本語である。それに対して、複合語は日本語とアイヌ語からなっているものもだいぶある。複合名詞も複合動詞の場合にもその言語の順序はどちらもある。しかしながら、複合動詞の場合にはマタギ語は日本語の変異形なので、文は動詞終わりである。また、複合語はアイヌ語のみからなるものはなく、必ず日本語の語が加わる。

さらに、アイヌ語の用言からの借用は一旦日本語の名詞とみなして扱うことにも留意する必要がある。これは外国語から借用される際には非常に厳格なマタギ語（日本語）のルールとしてある。

上記の資料に記載されているアイヌ語は方言上の相違が見られないのに対して、同時期の日本語には方言上の

差異が大きく存在した。また、アイヌ語の東北方言による地名（樺太方言も）には全く方言差が見られないことは既に地名研究でも報告されている（山田一九九五a・一五八―一五九・板橋二〇一四二・二六〇・二六四）。さらに、七、八世紀の日本書紀などの古文書に載っているアイヌ語地名においても東北地方のそれには方言差がなかったことが知られている。

樺太方言の地名も同様に方言差がないことも考慮すると、東北地方の日本人マタギ集団（日本語方言も同様）がアイヌ人と接触する以前も以後もアイヌ語の方言的相違が非常に少なかったことは、東北地方のアイヌ語（アイヌ系言語・蝦夷語）が大変古い時期のアイヌ語であると考えられる。

五 マタギ語の史的变化

マタギ語は先述したように、社会的・地域的であると同時に、アイヌ語彙と密接な関係を持つ接触言語である。さらに時空だけで限定してあるわけではなく、対里人、山の女神に対する秘密語でもある。

マタギ語は歴史的变化については日本語のそれと同じであるが、地理的関係上さらに遅れて変化した可能性もある。それを裏付けるものとして東北方言では前鼻音化が未だに残存している方言もあるためである。

本章ではいつごろアイヌ語から借用されるようになったのかという点について議論する。つまり、その借用は日本語の音韻変化の前か後かということである。この音韻変化の前後でいつ頃アイヌ語の借用語が流入したかが概略分かるのである。

もしマタギ語が音韻変化を引き起こし、アイヌ語からの借用語も同じ音韻環境で音韻変化を引き起こしている

場合には、アイヌからの借用語がマタギの音韻変化よりも前に起こったと言える。

逆に、もしマタギ語が音韻変化を引き起こし、アイヌ語からの借用語がマタギ語の音韻変化とは異なっている場合には、アイヌ語からの借用がマタギの音韻変化よりも後に起こったと言える。

例えば、マタギ語（日本語）の音韻変化 /p/ < /θ/ > /h/（実際に起こった変化）が起こり、アイヌ語からの借用語が同じ音韻変化をおこしたとすると、アイヌ語からマタギ語（日本語）への借用がこの音韻変化よりも前に起こったということになる。

よって、音韻変化 /p/ < /θ/ > /h/ が実際に起こった一六世紀よりも前にこの借用が起こったと言える。しかしながら、一六世紀のどの程度前から借用が始まったのかはわからないが、その変化が完了したのが一六世紀以前ということである。しかし、アイヌ祖語がオホーツク文化や擦文文化を併合した一一世紀頃に古代アイヌ語が形成されたと考えられているので、アイヌ語からの借用が完了したのは一一世紀から一六世紀の間と見られる。この両仮説を時系列で図式化すると、

(一) マタギ語の音韻変化以前に借用が起こった場合：

古代日本語期（～11th C.） 中期日本語期（～16th C.）

マタギ語： /p/ < /θ/ > /h/

アイヌ語からの借用語： /p/ < /θ/ > /h/

この場合にはマタギ語もアイヌ語からの借用語も同じ変化を経る。

(二) アイヌ語からの借用がマタギの音韻変化より後に起きた場合：

古代日本語（～11th C.） 中期日本語（～16th C.）

マタギ語： /p/ >/ɸ/ >> /h/

アイヌ語からの借用語： /p/ >/ɸ/ >> /h/

中期日本語（～17th C.） 現代日本語（～20th C.）

アイヌ語からの借用語： /p/ = /p/

（現代日本語 pan [パン]、purin [プリン]）

ここでは実際にアイヌ語からの語頭<ɸ>の借用語例がないので、西洋語からの借用を例にとり提示する：「パン」（ポルトガル語起源）や「プリン」（英語起源）の例は借用時期が一六世紀以降である。

日本語（マタギ語）にアイヌ語から一七世紀以降に借用されたとすると、<p>が語頭にそのまま変化せずに残り、<h>には変化しない。しかし、実際には<h>に変化している。よって、マタギ語に借用されたアイヌ語は一六世紀以前に借用されたものであると言える。

さらに、前述したように、古代アイヌ語を一一世紀とすると、この借用時期は一一世紀から一六世紀というところがこの言語変化から確定することができる。よって、アイヌ語の借用語のマタギ語への流入は時期的スパンがあるにしても、歴史的事実と言語学的事実によってその時間的幅が検証できたと見ることができると言える。

六 結論

マタギ語は日本祖語、あるいはその後の上代日本語以前の時期から派生した方言であると考えられることを述べた。しかし、マタギ語は一般の東北方言とそれほど変わりなく、同じような音声・音韻変化を経たものと考えられる。また、古代アイヌ語が形成された一一世紀ごろになって以降、徐々にアイヌとの接触が密になるにつれて、他の東北方言との異なり、特に語句の入れ替えが行われていったと考えられる。

六世紀に密教などの仏教が日本に伝わり、その影響もその後受けたが、マタギの動物解体時の呪文や儀式などに大きくその跡を残した。一七世紀以前には東北地方の多くの藩ではマタギを一般の獵師とは区別して特別のマタギ称号を与えた。

これは個人としての称号であると同時に、各藩で正式にマタギ集団としても徐々に認知されていったことである。この時期には里人とはマタギ集団を区別し、山の女神を崇め奉り、特別な精神性をもつ集団としてそれを言語という形で区別していったと見られる。それが最終的には秘密語としてのマタギ集団のアイデンティティそのものであり、その集団の一体感を持たせるのに大いに役立ったものと考ええる。

これはどの文化でも同じであるが、そのアイデンティティをもっとも強く映すのは言語であり、それが失われるとその文化が一機に衰退していく。それがマタギ語・マタギ文化に見られる言語消滅のものである。アイヌ語も同様に衰退したのである。アイヌ文化はアイヌの血をひく若者に受け入れられてきている。

現時点において、飛躍的な生活の向上があり、生業を立てるためのマタギ集団は不要となつてしまつたが、そこにはアイヌ民族と軌を一にする、先住民族的持続可能な経済があつた。自然を敬い、自分たちも自然の一部と

して生きていくとともに何世代か後の世代の子孫のことも考慮する、その生き方は現代の日本人がほとんど失いつつある宝である。

現在、特に叫ばれている、気候変動、環境破壊、地球温暖化への警鐘を鳴らす一つの方法としてのマタギ・アイヌの生き方やその言語の啓蒙には遅すぎるかもしれないが、全く何もしないでいるよりはよいかもしれない。つまり、この現実から何を学んでどのような意識で行動するかにある。

このような意味からも人間を中心に据える（人間支配の）生き方ではなく、自然と調和する生き方、太いパイプによる食物連鎖（循環）の継承が必要である。それはマタギやアイヌ、そして先住民族などの先人の生き方を見習いつつ、さらにそれを調和・超越していくだけの気づき・直感と知性（技術）が必要である。

そのための一環として、自然と人間の中間地域といわれる、「言語と文化」はまさにその「中間の緩衝地帯」であり、この「緩衝材としての言語と文化」は言語学者の使命として日本からの発信が必要だと確信している。

文献

マタギ..

板橋義三 二〇〇七「マタギ言葉に見られるアイヌ系言語語彙の言語学的特徴」『東アジア日本語教育・日本文

化研究』No.10、一七一―一八八頁

板橋義三 二〇一四『マタギ語辞典』現代図書

稲雄次 一九九三『武藤鉄城研究』無明舎出版

岩淵功 二〇〇三『弘前藩の狩猟（1）、（2）』草稿

太田雄治 一九九七『マタギ 消えゆく山人の記録』慶友社

長田雅彦 一九八二『最後の狩人たち 阿仁マタギと羽後鷹匠』無明舎出版

田中康弘 二〇〇九『マタギ 矛盾なき労働と食文化』えい出版社

田中康弘 二〇一三『マタギとは山の恵みをいただく者なり』えい出版社

戸川幸夫 一九六二『野性への旅Ⅱ マタギ ―狩人の記録―』新潮社

野添憲治 一九八九『マタギを生業にした人たち』同友館

弘前市編集委員会編 一九五九『砂子瀬部落誌』十和田岩木川総合開発協議会

武藤鉄城 一九六九『秋田マタギ聞書』慶友社

村井米子 一九八四『マタギ食伝』春秋社

森山泰太郎 一九六八『砂子瀬物語』津軽書房

アイヌ語…

板橋義三 一九九八「アイヌ語の接辞^{s.}と古代日本語の接辞、名詞^{s.}の同源性について」九州大学比較社会文化学府紀要『比較社会文化』第四卷 九九―一八頁

板橋義三 二〇〇四「樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語の高さアクセントの史的関係の解明」科学研

究費補助金研究成果報告書、課題番号：12610559、研究種目：基盤研究（C）（2）

板橋義三 二〇一四『アイヌ語・日本語の形成過程の解明に向けての研究』現代図書

大野晋、金関恕編 二〇〇六「考古学・人類学・言語学との対話 日本語はどこから来たのか」岩波書店

- 鏡味明克 二〇一三「アイヌ語地名研究の俗説・定説・補説」『日本語学』Vol. 32-6、七〇―七九頁
- 片山龍峯 一九九三『日本語とアイヌ語』すずさわ書店
- 金田一京助 一九六〇『アイヌ語研究』三省堂
- 小泉保 一九九八『縄文語の発見』青土社
- 斎藤成也 二〇〇五『DNAから見た日本人』筑摩書房
- 斎藤成也 二〇一七『日本人の源流』河出書房新社
- 瀬川拓郎 二〇一五『アイヌ学入門』講談社
- 瀬川拓郎 二〇一六『アイヌと縄文』筑摩書房
- 中川裕 二〇〇〇『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- 中川裕 二〇〇三「日本語とアイヌ語の史的関係」『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター、二〇〇九
- 一二二九頁
- 橋本萬太郎 一九七八『言語類型地理論』弘文堂
- 服部四郎 一九六四『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 松本克己 二〇〇三「日本語の系統―類型地理論的考察―」『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター、
- 四一―一二九頁
- 山田秀三 一九九三『東北・アイヌ語地名の研究』草風館
- 山田秀三 一九九五a『アイヌ語地名の研究1』草風館
- 山田秀三 一九九五b『アイヌ語地名の輪郭』草風館